

M-GTA 研究会 Newsletter no.6

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：青木信雄、岡田加奈子、小倉啓子、小嶋章吾、斉藤清二、佐川佳南枝、柴田弘子、林葉子、水戸美津子、筒口由美子、木下康仁

第 28 回 研究会の報告

【日時】 2004 年 9 月 11 日(土) 13:00～18:00

【場所】 大妻女子大学 人間関係学部棟 7247 教室

【参加者（敬称略）】

滝原香（富山医科薬科大学大学院）、塩塚優子（青梅慶友病院）、宗村弥生（東洋英和女学院大学院）、
寫末憲子（埼玉県立大学）、小嶋章吾（国際医療福祉大学）、坂本智代枝（大正大学）、隅谷理子（大妻女子大学大学院）、福島哲夫（大妻女子大学）、鹿野裕美（宮城大学大学院）、納富史恵（佐賀大学大学院）、鳩山淳子（佐賀大学大学院）、藤田奈緒（佐賀大学大学院）、長住達樹（群馬大学大学院）、埜崎健治（目白大学大学院）、江原美登里（東京都立田柄高校）、松井由美（国際医療福祉大学）、市江和子（日本赤十字豊田看護大学）、渡辺千枝子（山梨県立看護大学大学院）、小林美雪（山梨県立看護大学大学院）、百瀬ちどり（長野県立看護大学大学院）、水戸美津子（自治医科大学）、酒井都仁子（千葉県長生郡長南町立西小学校）、山川裕子（佐賀大学）、佐川佳南枝（西川病院）、宮坂友美（富山医科薬科大学大学院）、木下康仁（立教大学）の計 26 名

~~~~~

### **【研究報告 1】**

長期入院を体験した精神障害者の地域生活支援の課題に関する研究  
—長期入院を体験した精神障害者への質的調査を通して—

坂本智代枝（大正大学 社会福祉学専攻）

#### **I 本題**

##### **1. 研究テーマ**

長期入院の体験を持つ精神障害者が、どのような人間関係の相互作用によって、長期入院に至ったのか、退院から地域生活移行、さらに地域生活継続の現在に至るまでの人間関係の相互作用プロセスを明らかにすることで、当事者の視点に立った且つ実践現場に立脚した長期入院の精神障害者への地域生活支援の具体的な実践課題を提示することが目的である。

## 2. 現象特性

精神障害者が長期入院に至り、退院から地域生活移行及び地域生活の継続における家族、友人や医療・保健福祉従事者との直接的、間接的相互作用のプロセス。

## 3. M-GTAに適した研究であるかどうか

この研究の知見は、一つは当事者の視点からどのような相互作用があるのか、二つには、実践現場に基づいたグランデット・セオリーを導くことで、具体的な実践課題を提示することが可能だと考える。国策となっている 72,000 人の長期入院の精神障害者の地域生活支援の課題解決に向けて具体的な実践に役立つと考えられる。

## 4. 分析テーマの絞込み

- ① 長期入院の体験をもつ精神障害者が、長期入院に至った関係者との相互作用プロセス
- ② 退院、地域生活への移行さらにおける関係者との相互作用プロセス
- ③ 地域生活の継続を可能にした関係者との相互作用プロセス

## 5. データの収集方法と範囲

本調査に対して理解と協力を得られた精神科病院の長期入院を体験し、地域生活を継続している精神障害者 18 名に対して、半構造化面接を行った。調査協力者には、調査の目的を説明した上で、調査の録音を了解してもらい、秘密保持と研究結果をフィードバックする旨を付記した承諾書を渡した。調査期間は、2003 年 10 月～2004 年 2 月である。さらに、抽出された概念とカテゴリーについて、調査協力者全員にフィードバックし、フォーカス・グループインタビューにより、さらにデータ収集した。

本研究の結果報告については、来る 9 月 25 日に、調査協力者及び、地域の精神障害者、支援者（PSW）等に参加してもらいフィードバックする予定である。

データ収集に際して、長期入院の体験から地域生活へ移行し、地域生活を継続しているプロセスについてインタビューガイドを作成し、予めフォーカス・グループインタビュー調査をして、インタビューガイドを作成した。

データ収集の範囲は、A 市における地域生活支援センターの登録者（200 名）の中から、長期入院（ここでは、一回の入院で 6 ヶ月以上の入院を長期入院として定義した）を体験している 18 名の精神障害者が対象である。入院期間は 1 年から 35 年まで様々であったが、10 年以上の方々が大半を占めている。

## 6. 分析焦点者の設定

A 市の地域生活支援センター登録者で、6 か月以上の長期入院の体験をしていて、1 年以上地域生活を継続している精神障害者 18 名。

<質問及び検討事項>

- ① 概念の生成 → カテゴリー → コアカテゴリーのプロセスを丁寧に行うこと
- ② 概念名が説明的になり、うごきを表現した概念名になっていない.
- ③ 結果図は、プロセスを1つに現す必要がある.
- ④ 分析テーマが三つあるが、③地域生活の継続を可能にした関係者との相互作用プロセスを優先して、分析する必要がある. ↓  
独自に作った概念 → 独自の分析的知見 → 自分の解釈をいれること → 図に置換える  
→ 概念のまとめ
- ⑤ 専門用語が背後にあるので、データに密着して分析して概念名を作成すること.
- ⑥ ワークシートのデータに密着してみると、具体的な比較的对象をもつことで、地域生活を可能にしている. → データをもっと丁寧に分析すること

<発表の機会を与えられて(感想)>

今回発表の機会をいただき、自分の中で曖昧になっていたことが、整理されて今後の研究にたいへん参考になりました. 特に、概念の生成が、知らず知らずのうちにKJ法のような、共通項を見出す作業になってしまっていたことに、気づかされ、概念生成の意味と重要性が少し理解できました. しかし、これはすぐに修得できるものではなく、時間をかけて、言葉を選んで概念生成することが重要であることです.

分析テーマの絞り込みが、研究の散漫さを防ぎ、結果図も明確化されていくことで、いかに重要であるかがわかりました.

また、研究対象者が利用している施設が、先駆的な精神障害者の地域生活支援を展開していることで、データに偏りがあるのではないかという危惧もありましたが、木下先生より、「仲間のサポート」「仲間のモデル化」のところがコアになるとすれば、先駆的な実践現場でこそデータをとったことに大変意義があるとの指摘がありました.

全体を通して、10月に学会発表を控え、たいへん良き機会をいただきありがとうございました. 指摘いただいた箇所を木下先生の著書で確認すると、より理解しやすく概念の命名をし直している段階です. また、多くの方々に励ましをいただき、たいへんエンパワーされた研究会でした. 今後ともよろしくお願いいたします.

~~~~~

【研究報告2】

第一子出生後の父親の家事・育児における分担化のプロセス
～共働き家庭の父親について～

藤田奈緒 (佐賀大学医学部医学系研究科 母子看護学講座修士課程2年)

1、発表の要旨

＜はじめに： 5月の研究会での構想発表の際に、ご指摘を受けた内容（母子看護と本研究との関連）について＞

①母子看護学という領域は、臨床での母子への援助はもちろん、地域においての母子保健活動にもつながっている。母性と父性が生命の誕生にかかわり、健全な人間へと発達させるという重大な使命遂行への援助を目的としている。そのためには、母性と父性についての理解が必要で、母性・父性の健康に関する問題は個人や家族の問題にとどまらず、広く社会の問題でもある。

②看護学ということから、子どもを持ち親となる事は人間のライフサイクルのうち成人期という段階に該当し、これは発達上の課題の一つとされており発達上の危機と捉えることが出来る。エリクソンは、この時期の課題として「仕事と家庭生活において出来ることに意味を見出し、生産的（生殖的）であることを志向すること」を掲げている。よって、本研究では増加している共働き家庭の父親に焦点を当て、はじめて子どもをもち父親となるということを発達上の課題への適応と捉え、以下の事を明らかにしたい。

研究テーマ： 第一子出生後の父親の家事・育児における分担化のプロセス
～共働き家庭の父親について～

現象特性： 初めて経験する状況の変化（初めて子どもをもち妻の休暇を経て、再び共働きへと戻っていくという生活環境の変化）の中で、父親の家事・育児行動が分担化（日常生活化）へと至る、妻・子ども・保育園・職場などとの直接的また間接的な相互作用のプロセス。

M-GTAに適した研究であるかどうか： 父親と家族・職場などとの間における社会的相互作用に関わり、看護学・保健学領域におけるものである。また、研究対象とする現象がプロセス的性格を持ち合わせている。母子保健領域において健やかな家庭作りへの援助のあり方や方向性を考えていく一助となると考えられる。

分析テーマへの絞込み： 明らかにしたいプロセス＝初めて子どもを持つという発達の危機に直面した共働き家庭の父親が、妻や子どもなどとの関わりを通して、家事・育児行動を日常行動化していく過程。

分析テーマ・・・「家事・育児における日常行動化のプロセス」

家事・育児についての ①認識（捉え方）の変化 ②実際の行動の変化に焦点を当てる。

データの収集法と範囲： 父親に対するインタビューを実施、8月末までに9例終了。

分析焦点者の設定：第一子出生後の共働き家庭の父親（構想発表にて提示したものと同一）

分析ワークシート： 例として「合理的な思考」を提示した。

カテゴリー生成： 認識について＝13の概念から5カテゴリーを生成し、3つの領域に分けた。行動について＝11の概念から5カテゴリーを生成。現在のところ、コアカテゴリーはない。

結果図： 現在作成している概念とカテゴリーの関係を示した。

2、質疑応答とコメント

・概念としてあげているものが、説明的でまだ概念までいっていないのではないかな。もう少し考えた方がよいのではないかな。

・どういうところを分担化として捉えているのか。→ 父親が家事・育児を当たり前に行っているというような言動がみられたり、主体的な反応が出ているところを分担化（日常行動化）としている。

・どういう所がオリジナルの知見として出てくるのか。→ ①共働きという忙しさで必要に迫られての家事・育児はもちろん、それは育児に対する価値という部分に支えられているということが大きいようだ。（文献では自分の時間がないことに対するストレスが大きく占め、家事・育児にうまく入ることが出来ないという報告があった。）②家事行動に比べて育児行動の方が日常行動化していくのが早く、意欲的であるようだ。

・家事・育児を分担化していくなかで、夫婦間の話し合いという要素は出てこないのか。愛情面において、父親の愛情が妻から子どもへと変化していくという部分があると聞かれているが、概念として挙がってこなかったのか。

・育児・家事の“分担”というイメージがしっくりこない。分担化についてどう考えているのか。→ 家事・育児行動に対する捉え方とあわせてどう行動が変化しているかという所を見たい。分担化とすれば、認識面・行動面が含まれるのではないかと思い、設定した。

・対象者の平均年齢を出す必要があるのか。→（木下先生より）分析上必要となつてこない限りは必要ではないが（分析情報ではないが）、むしろ対象者についての説明情報として提示の方が論文全体への理解を得やすいと思う。

・報告で例示の概念を含め、概念の命名はもう少し検討した方が良い。結果図だが、配布されたものは共働きになる以前の範囲が広くとってあり、分析結果を反映していないのではないか。共働き以降の部分を中心に示した方が良いのではないか。ここまで作業が進むと、ストーリーラインを早急に書いてみる。

“分担化”の捉え方…記述的な意味で分担化としており、内容としては具体的にどんなやり繰りをしているのかという事を示したいのではないか。父親の「行動」の部分で、家事や育児についてデータの持っている具体的な内容が分析に反映されていない。(以上、木下先生のコメント)

3、感想と展望

今回の研究会では発表の機会を頂き、大変感謝しております。木下先生をはじめ、皆様からの貴重なご意見やご指摘を頂き、本当にありがとうございました。客観的に自分の研究を見ることが出来、沢山の有用な考え方を得る事が出来ました。これから分析を進めていくうえで活かしていきたいと思います。概念生成についてもっと見直し、分担化という表現についても再考し、分析を進めていきたいと思います。

研究会に参加させて頂いている期間はまだまだ浅く、このような発表をさせていただく事にためらいもありました。しかし、皆様からのご指導や意見交換のなかで、自分の研究について多くの気付きを得て、考えを深める事が出来ました。木下先生の著書とこの研究会によって、M-GTA についての具体的な理解が出来ていくことを感じます。今後とも、よろしくお願い致します。

~~~~~

#### 【研究報告3】

精神障害者支援関係職種勉強会参加者による意識の変化  
～多職種による勉強会開始から1年間の調査より～

埜崎 健治(目白大学大学院心理学研究 臨床心理学専攻 M2)

#### 1 発表要旨

##### 1) 研究テーマ

精神障害者支援関係職種勉強会参加者による意識の変化  
～多職種による勉強会開始から1年間の調査より～

##### 2) 現象特性

チームアプローチの必要性は感じているがうまく連携が取れない、どのようにチームアプローチをしたらいいのかわからないと考える人たちが勉強会を開催する。その中で職場

では出会うことがないが、同じような問題意識を持つ人たちとの討論を通じてチームアプローチについて考えていく。

### 3) M-GTA に適した研究であるか。

多職種による合同勉強会を開催してその勉強会がどのように変化していくのか、また参加者個人の意識がどのように変化をしていくか、また勉強会でどのような考え方（概念）が得られそれが支援の場でどのように役立っているか調査検討をする。

### 4) データの収集法と範囲

対象：勉強会参加者(15名)

調査期間：平成15年9月～平成16年8月までの1年間

参加者15人対象にインタビュー(半構造化面接)を2回行う。

### 5) 分析テーマへの絞込み

職場や支援の場では出会うことない人との職種・職制・立場にこだわらない対等な立場での討論を通じて、参加者の意識がどのように変化して、勉強会で得た知識・技術・ネットワークがどのように支援の場で生かされているのかを分析する。

### 6) 分析焦点者の設定

勉強会参加者15名

### 7) 分析ワークシートの作成

32の概念を形成。「わかちあい（気持ち）」を提示

### 8) 結果図

現在作成している概念の関係を示す。

## 2. 質疑応答要約

- ・ 概念、カテゴリーが明確になっていない。
- ・ 分析テーマの絞込みが明確になっていない。（テーマが意識の変化についてと、実践に活かしているかについての2つがあり、それを1つに絞り込む必要がある。）
- ・ この研究の新しい知見は何か。
- ・ 意識変容のプロセスを明確にしたほうがいい。
- ・ 「わかちあい」という概念はセルフヘルプグループの概念であり、その定義のイメージが強くなるので、他の概念名がいいのではないかな。
- ・ 概念化が分類的になっているのではないかな。

- ・ 分析テーマを短い文章で表現してみるといいのではないかな。

### 3 感想

分析テーマの絞込みの重要性を改めて認識しました。データから多くの情報がとれると、色々なことを研究に入れたくなり、そのためにまとまりがなくなってしまうことに気がつけました。

また、M-GTA に適した研究であるかどうかは、

- ①人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究
- ②ヒューマンサービス領域である研究
- ③研究対象とする現象がプロセスの性格を持っている研究などの項目に該当するかだけでなく、M-GTA でなくては得られない知見は何か、多くの質的研究法がある中でなぜ M-GTA を選択したのかを考える必要があると思いました。

最後に、準備不足な状態で研究会に発表をさせていただき、参加者の方々には誠にご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。しかし、皆様の的確なアドバイスにより本を読んだだけでは気がつけなかったことをたくさん気がつき、学ぶことが出来ました。本当にありがとうございました。

~~~~~

【研究報告 4】

養護教諭のケア／ケアリングに関する研究 ～児童と養護教諭の互恵的ケアリング関係構築プロセス～

宮城大学大学院 看護学研究科 鹿野裕美

I. 発表の要旨

1. 研究目的

小学校における、養護活動（養護教諭のケアの場面）において、児童と養護教諭との間に存在する、ケアリング関係が、互恵的に構築されているプロセスを明らかにすることを目的として研究を行う。

2. データー収集法

- (ア) 質問紙調査 <目的> ケアに関する意識の把握
 <結果> 回収率 56.9% 回収 70 通

(イ) 面接調査

- <時期> : 7 月 7 日～8 月 20 日
<対象者> : 面接受諾者 19 人 ⇒ 面接実施者 15 人

＜平均勤務年数＞：19.9 年

(1～10 年目 0 人, 11～20 年目 7 人, 21～30 年目 7 人, 30 年超 1 人)

3. 分析焦点者および分析テーマについて

＜分析焦点者＞養護教諭

＜分析テーマ＞児童と養護教諭における互恵的ケアリング関係（構築）プロセス

＜疑問＞

- 1) 分析焦点者を養護教諭と設定したが、どうか。相互関係をデーターとして分析すると、分析焦点者は、養護教諭・児童の双方向になってはいないか。「相互作用それ自体に分析の焦点をおく事もありうる（木下 2003）」とは？
- 2) バリエーションのダブリは可能か？
- 3) 概念名をつけるとき、カテゴリー名をつけるときのこつは？
わかりやすさなのか、または独自性、オリジナリティのあるものか。

II. 質疑応答まとめ

○分析テーマの「互恵的ケアリング関係」という意味は？

→養護教諭が児童にケアをしながら、実際はケアされているというか、何かが子どもから返って来る、という意味。

⇒養護教諭がケア（仕事）としてやっていることと、児童から得られるものの、二つの意味がわかりにくい。

○互恵的ケアリングという言葉の意味について議論が発生してしまうから、分析テーマとしては良くない。この表現は用いず、「互恵的」と「ケアリング」に代わる言葉をさがす。

分析テーマは、幅広くヴァリエーションがキャッチできて、かつ研究者の問題意識を含めているものがよい。この場合は、分析焦点者は養護教諭でよい。子どもの反応や現象についての概念も、それ自体が養護教諭の目からの解釈なのでは？

○概念図のカテゴリーの中にコアカテゴリーがあるが・・・。

→すみません。単純ミスです。

○概念「いやされ感」について。共感して同一視してしまうことはある意味危険なのでは？

→職業というくくりはあっても、その中で人としていやされる感じはあるのではないか。職業としての意識はあくまでもプロとしてであるが。

○逐語録下線部、概念「いやされ感」について解釈の流れをもう少し説明して。

→ケアした子どもから何かの反応があって、それが単純に自分の心に「癒し」として入ってきた現象を考えた。そういう養護教諭の反応を「いやされ感」とした。

⇒むしろ、このように「反応した」養護教諭について、何故そうした反応を示したのか、その意味を解釈すべきではないか？

○健康な人でもケアすることで、癒される事はあるが、この研究では、マイナス、疲れている、どこか欠損感のある養護教諭として、考えてみてもいいのでは？

→養護教諭の仕事を考えたときに、経験年数により、このようなかかわりが可能となってくるのではないかと思っている。が、このような個人の特性も分析の課題としたい。

○ 分析焦点者は養護教諭でよいと思う。養護教育についての研究論文として成立するように、意図的な視点を組み入れたほうがいい。

○ 理論的メモは疑問形で表記するとよい。

<感想>

5月の構想発表を終えて、分析テーマも、自分なりに随分絞ったつもりではいたのですが、いかんせん、それは自分の思い込みで、ある意味、自分としても、身動きの取れなさを、感じていたので、ここで発表させていただいて本当によかったと思っています。原点に戻って、一からデータを見直し、分析に取り組んでみます。

分析テーマは「小学校における養護教諭と児童の関係形成プロセス」として、今までよりも少しフラットにしようと思っています。

話は変わりますが、懇親会もとても楽しく参加させていただきました。尽きることのない話が、何よりの収穫ともなりました。

貴重なご教示をいただきました皆様方に、心から感謝申し上げます。

~~~~~

#### 【構想発表1】

「生き生き健康教室」による日常生活改善プロセスの研究

—健康増進事業における理学療法士の果たすべき役割について—

群馬大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 修士課程2年 長住達樹

## 1. 発表の要旨

G 県 F 村 2 地区にて、健康体操や趣味活動などを中心に、健康増進と相互交流を目的とした「生き生き健康教室（以下、健康教室）」を実施している。今回、健康教室参加者に対して、生活改善に関する簡単な記名式スクリーニングを実施した結果、生活改善群と生活非改善群が存在した。本研究は、健康教室参加者の生活改善に向かうプロセスや、改善を阻害するプロセスを分析し、その対策・改善策を立案することにより、日常生活改善に向けた効率的な高齢者健康教室の実施方法について検討することを目的としている。

今回の分析課題は、指導内容や健康体操などを習慣的に実施することによって生じる生活改善と健康意識の変化や、参加者自身が周囲（家族や親戚および近隣）へ健康意識を向上させる指導的働きかけによって得られる健康意識の共有化などを現象特性として掲げ、その中でも日常生活の中に偶発的あるいは意図的に健康活動（体操）を組み込んでいくプロセスや健康を意識した地域交流活動（趣味活動などが多様化していくプロセス）に焦点をあてる。その分析焦点者の設定では、記名式スクリーニングの配点表に基づく合計点数を算出し、配点の高い回答から降順に並べ、上位から 20%を生活改善傾向群、21～80%を生活非改善傾向群、81～100%を生活悪化傾向群とした。（※今回、生活悪化傾向群は対象外）さらに、各傾向群の中で参加率 60%以上の対象者に限定して半構造化面接を実施している。（9 月以降も実施）

＜分析焦点者＞ 生活改善した参加者 →（生活改善群） 8 名  
生活改善しなかった参加者 →（生活非改善群） 6 名

最後に、分析ワークシート（概念名：日課となった健康体操）を一つ挙げて、概念生成に至る方法とその妥当性について、推測的・包括的思考に基づいているかどうかを論点に参加者に意見を求めた。

## 2. 質疑要約

- 分析ワークシート（理論的メモ）より・・・これまでに四肢・体幹筋を伸張することによって筋疲労や疼痛が軽減した経験もあるようだ・・・とあるが、これは「日課となる健康体操」とする概念から分割して「体感した効果」とする概念を生成したほうが良いのではないか。また、健康体操を生活の中で①そのまま実施しているのか、②アレンジして実施しているのか、③時間を短縮して実施しているのかなどの概念的要素に注意しながら、今後の分析を進めたほうがいい。
- 記名式スクリーニングの質問項目の中で、健康教室への参加を決めたきっかけについての回答項目があるが、そのデータも利用した方が良いのでは。
- 分析テーマへの絞込みに関して、日常生活の中に偶発的あるいは意図的に健康活動（体操）を組み込んでいくプロセスという絞込み方では、将来構築するコアカテゴリーが

平坦化してしまうのではないかと、そこで、組み込んでいくプロセスではなく、組み込んでいく生活活動プロセスとして絞り込んだ方が研究テーマに合致して良いのではないかと。

- ・ 今回、生活改善群に対するインタビューを実施しているが、このような（治療的特性を持つ）効果に対するインタビューにおいて、治療的あるいは指導的立場の者がインタビューを行う場合、得られる回答としては高い効果を示す傾向（効果があった）になってしまわないか？ ⇒ （木下先生）分析焦点者の設定方法（生活改善群、生活非改善群への絞り込み）がユニーク。対象者についてのひとつの方法論的限定。データの分析にあたっては改善群で生活が改善しない部分について丁寧に見ていけば、この問題に対してみていくと、今回の対象者の選定が生きてくるのではないかと。このように対極比較的発想を組み込んでいくことによって、より有効な知見として提示出来ると思う。

### 3. 感想

今回は、構想発表の機会を頂きまして大変感謝しております。質疑では、木下先生および水戸先生をはじめ M-GTA の先生方から、研究方法の不備な点や今後の取り組みの中で注意すべき点などを中心に、貴重なご意見・ご指導を頂きました。今後、指導内容を振り返りながら、緻密な分析作業を行っていきたいと思っております。分析した概念・カテゴリーが、将来どのような結果図となって出現するのか、胸躍る気持ちで、様々な概念生成からカテゴリー生成に向けて意欲的に取り組んで行きたいと思っております。今後とも宜しく願い申し上げます。

.....

#### 【次回の研究会】

日時： 第 29 回 12 月 11 日(土) 午後 (13:30-18:00 を予定)

場所： 立教大学 (池袋キャンパス) の予定です。詳細は後日MLでお知らせします。

#### 【編集後記】

- ・ 今回は初めて立教以外でした。会場の準備、懇親会の手配などで福島先生、隅谷さんにご尽力いただき、ありがとうございました。
- ・ 10 月 2 日には出雲で公開研究会があります。島根県立看護短大の石橋先生、梶谷先生、それに事務局の佐川さんが中心となって準備を進めてもらっています。当日の様子など、次回のニューズレターでご報告します。
- ・ どうぞ、お元気にお過ごしください。

(木下記)